コーパスに基づく自然言語の多義性の語用論に関する基礎研究

（プロジェクト番号：　Ａ０６－４３６）

Corpus-based Studies on Pragmatics of Ambiguity in Natural Language

プロジェクト代表者：　山中信彦（教養学部・准教授）

Project Director: Nobuhiko YAMANAKA (Faculty of Liberal Arts, Associate Professor)

Ⅰ．研究の経過

本プロジェクトでは多義性を巡るコーパスを利用したリアルな語用論研究を推進した。認知科学と社会科学の両分野に接する次の二つの問題を、コーパスの豊富な例に基づき実証的に解きあかそうとした。

（テーマ1）　「コーパスに基づく構造的な多義性の解消の研究」

人間がいかにして単一の意味を認知するかという問題は、言語の理解・産出の根本問題のひとつであり、言語学、哲学、認知科学を横断する話題である。特に、多義的な並列名詞句構造は名詞形態論の貧弱な日本語において頻出するにもかかわらず従来機械翻訳などの工学的な研究は別として、認知心理学的な多義性解消研究においてはなおざりにされてきた。また、これまでの多義性解消研究では実際の用例は利用されていなかった。従来の認知心理学的な多義性解消（複数意味からの適切な選択）研究は、人為的に作成された少数の刺激文に基づく実験によるものが一般的であったが、研究代表者の実施する研究では実際に用いられた多数の例に基づいて理論構築とその検証を行う。このことによって多義性解消の技術の精度を大幅に高めることができる。コーパスを用いてさまざまな種類の構造的な多義性についてこれを行い、機械翻訳に使える精度の多義性解消の理論を提案したい。

（テーマ2）　「『まじめ』の語用論的・社会言語学的記述」

「まじめ」という語は文脈に応じて＜本気＞と＜規範的＞のいずれかの意味要素が前景化され一見すると多義語の様相を呈するが、英語ではこれらの意味要素は別の語で表され「まじめ」の全ての用法をカバーする単一の語は存在しない。研究代表者は、「まじめ」という多義的な用法をもつ語の意味を分析し単一の意義素によって記述する提案を行っているが、本プロジェクトでは言語学的な記述を超えて特に日本社会における様々な「まじめ」現象を具体的に広範囲に取り上げ、社会学のラベリング理論や逸脱理論の観点から検証する。本研究は日本人の思考形態及び日本社会の諸現象のかなりの部分が、「まじめ」の多義性によって説明されうるという仮説に基づいており、これが正しい方向であれば土居健郎の「甘え」理論に比肩しうる斬新で大胆な提案であることになる。

（テーマ1）については、当初、「小さな書斎の窓」のような多義的な統語的修飾構造をもつ表現を調査し、人間はいかにして意味をひとつに絞れるかを説明する認知モデルの構築を目指した[「日本語の多義的な名詞修飾構造の解析」,『言語研究』第94号, 1988]。以後、この認知モデルの研究は、論文[「いわゆる『若い男と女』の多義性について」, 山田・菊地・籾山編：『日本語意味と文法の風景』, ひつじ書房，2000年]に発展した。ここでは名詞句並列構造の単純なタイプを例として多義性解消の方略を検証した。論文[業績1]において、枠組みとしてR. Schankの統合的処理仮説にD. Cruseの語彙的共起選好理論と

D. SperberとD. Wilsonの関連性理論を援用し、「前の建物の一階のバーの赤と黄のネオン」のような複雑なタイプをも含む名詞句並列構造一般に適用可能な包括的モデルを提案していたが、投稿先から掲載の見込みはあるが書き直しが必要との評価が返ってきた。査読者の修正要求の多くは研究代表者にとって納得しがたいものであったため、より多くの用例の分析と、購入した最新の文献による理論的サポートによってさらに拡大・精緻化させ別の雑誌に投稿しなおした。

（テーマ２）については、研究代表者は既に「まじめ」という語の意味を分析し単一の意義素によって記述する提案を行うとともに、この単一の語彙的意味が語用論的文脈からどのような影響を受けて一見多義的な用法をもつように見えるに至るかを論じた。さらに、「ふまじめ」の意味についても考察し、これら二語の意味記述に社会的規範に代表される価値基準という概念を取り入れることがいかに重要であるかを主張した[「『まじめ』の意味分析」,『国語学』第191集，1997]。今回は、プロジェクト経費で購入した関連の文献を分類し利用法を検討するとともに、新聞記事を中心とする補足資料を収集した。さらに、近い将来著書の形でまとめることを念頭に置いて構想を練り、目次を初めとするメモを作成した。今年度中に書店に打診する予定である。また、卒業論文に同じテーマを選んだ学生がいるので、今年度中に主として大学生を対象とした「まじめ」という語の用法に関するアンケートを行わせ、その結果を研究のデータとして利用し、論文にまとめて学会誌に投稿しようと考えている。

Ⅱ．研究の成果

1. Yamanaka, Nobuhiko: “The Resolution of Ambiguities in Coordinate Noun Structures in Japanese: A Corpus-based Study”,（邦訳題名：「コーパスに基づく日本語における並列名詞句構造の多義性解消」），（投稿中）.